

1930年代の女学生

— 秩父高等女学校の場合 —

村上 淳子

I はじめに

本稿は、昭和5年(1930)に設立された埼玉県立秩父高等女学校をとりあげ、ここに学んだ女学生の具体的な在り方を学校と地域との関わりにおいてあとづけるものである。

学校教育の浸透は、地域の近代化をはかる一つの指標となるものであり、その浸透の過程をたどることは、地域の特性を浮き彫りにし得る方途である。その中で、女学校が地域との関わりにおいてどのように存立し、また、女学生たちの具体的な在り方が如何なるものであったのかをあとづけることで、秩父における近代化の一側面を明らかにし得るものと考えられる。

II 秩父における女学校の成立

日露戦争を経た明治40年(1907)5月、秩父郡大宮町に秩父高等女学校の前身である大宮町立裁縫女学校が設立された。その目的は、「女子ニ普通教育ノ補習ヲナシ且裁縫・家事・編物等ニ関スル知識技能ヲ授クル」¹⁾というものであった。裁縫女学校は秩父における初めての女子中等教育機関であり、入学資格は高等小学校4年を修了した13歳以上の女子とされた。

明治5年(1872)に学制が頒布され、秩父においても小学校が各区に設立された。明治7年、大宮郷における就学状況は就学生95に対し不就学生395と、不就学が全体の8割という圧倒的多数を占めていた²⁾。2年後の明治9年には、男72女33計105の学童数が確認できる。この頃女子の就学は、男子の半数以下に止まっていた。

教育は地元の負担によったため、明治17年

(1884)の自由党・困民党の蜂起では「国税ヲ除クノ外諸税並学校等ノ廃止ヲ強訴スル事」という条文が「約定書」に含まれていた³⁾。明治14年以降松方デフレによる地主への土地集積に加え、生糸の暴落は養蚕を現金収入の方途としていた生産農家や仲買業者を困窮に追い込んだ。生糸の価格は、明治15年の一斤当り7円92銭から翌年には3円88銭と激しい急落振りを示していた⁴⁾。秩父郡では教育費が明治16、7年頃から減少し、町村が教育費の減額を主張するという景況が郡長により報告されている。小学校の授業料に5銭から50銭までおよそ30余りの段階を設けたのは、「女子ハ生糸取ヲシテ母姉ヲ助ケ、男子ハ薪ヲ樵テ父兄ヲ幫ク等、山谷ニ必要ノ業ニ従フ、茲ヲ以テ大宮、小鹿野、皆野、下吉田、野上等ノ平坦ナル地形ノ便利アルト、人戸多ク人智稍進ミタル地ヲ除クノ外ハ尋常小学校スラ、卒業スル生徒ハ十ノ三、四ニ止マルヘシ」⁵⁾という地域の状況を反映したものであった。さらに明治25年(1892)、大宮町外27ヵ村の授業料徴収状況は「寧ろ徴収セサルニ如カス、且授業料トシテ徴収スルトキハ大ニ苦情ヲ惹起シ」⁶⁾というものであった。

こうした中、明治16年(1883)6月、大宮郷の有力者であった宮前藤十郎らにより秩父教育義社が創立されている。これは「社員」の義捐金により「学資ノ為メニ阻碍セラレ」⁷⁾ている郡内の子弟に学資を貸与・補助し、「固有ノ才智ヲ発起セシムル」⁸⁾との目的で創設された。教育への期待は、「社規」にある「他日我郡ヲシテ博士ノ叢淵ト為サンコトヲ望ム」⁹⁾との言葉にもあらわれていた。秩父は、生糸を媒介に開港場から新しい文化を取り込む先進性を備えた土地であっただけに、明治初期既に「灯火の下で福沢諭吉『学問ノススメ』

初編を学び」¹⁰⁾という小学校教師の姿を認めることができた。地域の経済状況を反映しながらも、教育の必要は学校をとりまく周辺からも訴えられていったといえる。

秩父では中等学校が整備される以前、小学校を修了した後さらに進学するためには浦和や熊谷、あるいは東京などの県外にまで出る必要があった。明治15年(1882)に4年制の郡公立中学校が大宮郷に設立されたが、生糸下落の打撃や松方デフレのおおききを受け、同19年の中学校令改正を機に廃校された。以後、秩父に中等学校が設立されるのは明治34年(1901)になってからであり、設立されたのは郡立農業学校であった。この時までには県内に設置された中等学校は、明治6年創立の師範学校、私立埼玉中学校(明治19年)、日清戦争後創立の浦和・熊谷両県立中学校(明治29年)、川越・柏壁中学校、児玉の私立競進社蚕業学校(明治32年)であった。女子については、明治31年創立の私立埼玉女学校、明治33年に埼玉県高等女学校、翌年女子師範学校が設置された。埼玉高女は私立埼玉女学校を包摂し、明治34年に浦和高等女学校となっている。

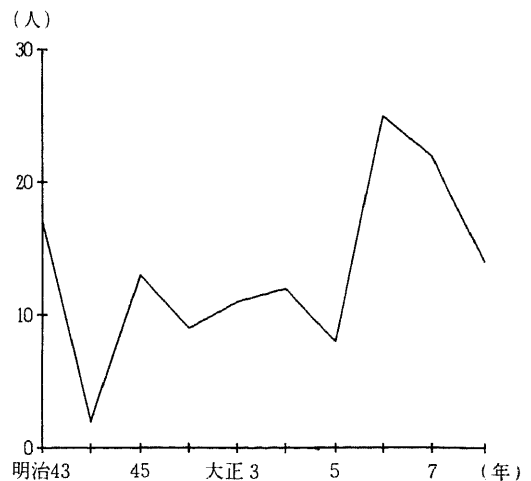
他方小学校への就学率は、明治37年(1904)の日露戦争以後全国平均で男女とも90%を超えるにいたったが、埼玉県では明治34年に男女とも就学率90%以上に達しており、これは前年に尋常小学校の授業料を廃止したことによるとされる¹¹⁾。明治41年(1908)には義務教育年限が4年から6年となった。翌42年の秩父郡内の就学率は、男98.19%、女97.19%であった¹²⁾。裁縫女学校は、初等教育が拡充し、小学校高等科への進学者が漸増する中で設立可能となったのである。

ここで、大宮町立裁縫女学校の設立についてみておきたい。明治40年(1907)4月、当初大宮町立実業補習学校として県に申請したが認められず、5月に裁縫女学校として再度申請、認可された¹³⁾。設置場所は大宮尋常高等小学校内であった。『埼玉縣秩父郡誌』が伝える創立の背景は「当時三十七八年戦役の後を承け、教育各方面の事業振興せらるゝ際なりしを以て、大宮町は女子教育

の普及の必要を認め此の挙に出でしなり」¹⁴⁾というものであった。生徒定員は60名、修業年限は2か年、高等小学校4年の課程を修了した者が入学の対象であった。明治33年(1900)における秩父郡の高等小学校女生徒数は162名であるが、これは他郡に比して極端に低い数値であった¹⁵⁾。5月に創立した女学校が実際に開校されたのは11月に入ってからであり、生徒の入学は翌41年の4月に行われた。生徒数は定員に満たず、予算での50名という見通しをも下回っていた。第一回卒業生数は17名であり、大正8年までの町立裁縫女学校の卒業生数は次の通りである(第1図)。

学科及び教授時数は各学年共通で修身1、国語4、算術2、家事1、裁縫21、編物1の計30時間であり、裁縫は全体の3分の2以上を占めていた¹⁶⁾。教員は専任・兼任各1名、校長は大宮尋常高等小学校長の浅見宇市¹⁷⁾が兼任した。俸給は、校長が「無報酬」、訓導は月俸15円、嘱託教師は手当5円であった。授業料は一人月額30銭、小学校の授業料5銭にも事欠く家庭にとっては勿論高額であった。こうした授業料の不足分を補うのは、町村費であった。

秩父に裁縫女学校が設立された後、翌明治41年



第1図 大宮町立裁縫女学校における卒業生数の推移
(『秩父高等学校沿革史』より作成)

(1908)には本庄、42年には越ヶ谷、43年には久喜、児玉に公立の裁縫女学校が設立された。因みに、本庄・久喜の裁縫女学校における授業料は50銭であった¹⁸⁾。

裁縫女学校第1回卒業生の一人は、開校当時の様子を次のように回想している。

高等科を卒業した人は家にいておもにお裁縫、ごく少数の人がお茶やお花を習うためにそれぞれ先生のお宅へ通っていました。そうした人が裁縫学校開校ときいて集まりましたので生徒の年齢にも幅があり服装もまちまちでした。きれいな日本髪に帯を高く結んだ人も半数位はありました¹⁹⁾。

裁縫女学校に通った生徒の多くは、ここにみられるように高等小学校を卒業しお茶やお花を習う余裕のある富裕な家庭の子女であった。

公立の裁縫女学校が各地に設立される一方、高等女学校の設立も進められた。明治44年(1911)には県立高等女学校が川越、熊谷に設置された。また、明治43年高等女学校令が改正され、実科高等女学校の設立が認められたことで翌44年粕壁町に、ついで大正4年(1915)には忍町、翌年には所沢にそれぞれ公立の実科高等女学校が設立された。

こうした動きの中、大正6年(1917)の秩父町立裁縫女学校卒業生数は、前年の8名から25名へと急増し(第1図参照)、大正7年2月の秩父町議会においては実科高等女学校設置が議案となっている。ここでは「時代ノ進歩ニ伴ヒ實際家庭ニ適応セル主婦的教育ノ切実ナルヲ認め」²⁰⁾とその設置理由が示されている。そして、同年7月には文部大臣に宛て「実科高等女学校設立之義ニ付認可申請」が秩父町長伊古田豊三郎²¹⁾により申請された。「申請書」は、実科高等女学校の必要を次のように訴えている。

国策發展ノ上ヨリ見ルモ、将々又地方改良上ヨリ考フルモ、女子教育ノ普及上進ヲ計ルハ目下ノ急務ナリ。此ノ種学校ハ本県内ニ数校アリト雖モ、当町

ノ如キハ県ノ西端ニ位置シ他校トノ距離甚ダ遠ク、為メニ就学上常ニ遺憾ノ点不尠、殊ニ当町ノ状勢ヲ見ルニ、年一年ト人口増加シ(中略)随テ向学ノ思想モ亦頓ニ發達ノ実況ナリ。(中略)今其概況ヲ見ルニ、近時熊谷町其ノ他ノ高等女学校ニ学ベルノ女子年々増加ノ傾向ヲ示セリ。然リト雖モ女子ハ其性自ラ男子ト異ナル所アリテ、速ク家庭ヲ離レテ他郷ニ遊学スルハ種々ノ不便ト弊害トヲ生ジ易ク、斯ル事情ハ既ニ世人ノ等シク之ヲ認ムル所ナリ²²⁾。

熊谷まで進学する女子が増えているという状況であり、また、秩父郡では大幅な人口の増加を迎えていた。大正2年(1913)に102,939人であった郡内人口は同7年に108,251人となり、5年間に約5,300人の増加をみせていた²³⁾。秩父における人口の増加は、第一次世界大戦後の好景気の中、織物業において動力織機が導入され生産力が上昇し、工場形態を採る機屋が増加、機業を新たに開業する者が多数あらわれたことが背景にあった²⁴⁾。また、大正3年10月には上武鉄道が大宮町に乗り入れ、同6年には秩父-影森間が結ばれている。さらに大正11年(1922)、翌年の秩父セメント株式会社創立に際し、輸送力増強をはかった電化が実現された。鉄道の乗り入れやセメント工場の設立も、秩父の人口異動に大きく関わっていたとみられる。地域の経済に影響される教育は、産業の発展という時流に乗って新たな展開を遂げることとなった。

大正7年(1918)10月設置が認可され、翌年4月に開校となった秩父町立実科高等女学校について触れておこう。同校学則によると、修業年限は2か年、生徒定員は100名であった。入学資格は満14歳以上で高等小学校2年を修了した者、及び同等以上の学力を有する者とされ、授業料は月額1円であった²⁵⁾。学科と教授時数は次表の通りである(第1表)。裁縫の時数が15時間と最も多く、高等女学校令において随意科目とされた「実業」を「商工業ニ関スル大意及実習」として加設していた。教員は、開校以後順次任命していった様子が『秩父高等学校沿革史』からうかがえる。大正

第1表 秩父町立実科高等女学校における学科と教授時数(大正8年)

学 科	第 1 学 年		第 2 学 年	
	課 程	毎週教授時数	課 程	毎週教授時数
修 身	教育ニ関スル勅語、道徳ノ要領、作法	2	教育ニ関スル勅語、戊申詔書、道徳ノ要領、作法	2
国 語	講読、文法、作文、習字	6	同上	6
数 学	算術	2	同上	2
家 事	衣食住ノ事項	3	育児、養老、看護、経済、簿記	3
裁 縫	裁方、縫方、繕方	15	同上	15
実 業	商工業ニ関スル大意及実習	3	同上	3
体 操	教練、体操、遊戯	3	同上	3
計		34		34

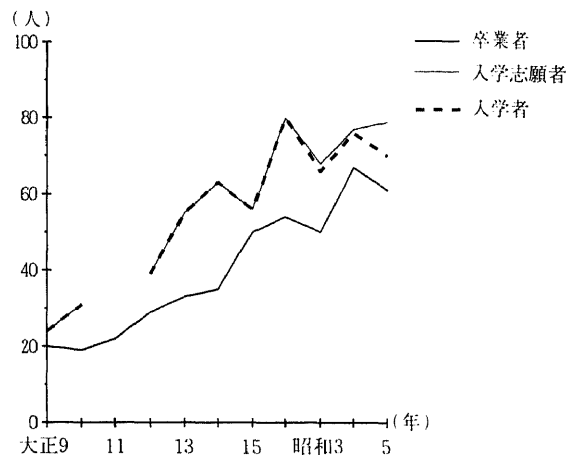
(『埼玉縣秩父郡誌』326-327ページより作成)

8年度新たに任命された教員には、宮崎県から着任した教諭が1人、兼任として郡立農業学校教諭1人、囑託として大宮尋常高等小学校訓導2人の名があった。校長は引き続き浅見宇市が小学校と兼任、裁縫女学校以来の教諭が1人おり、当初専任2名、兼任4名という構成であった。

大正11年(1922)4月に入学、同13年に卒業した実科第5回生は、在学当時の思い出を次のように語っている。

(前略)大宮小学校(当時の秩父駅前にあった現秩父一小の北の一週にあった校舎)に通いました。授業は和裁が主で、ミシンも少々踏みエプロン等も縫い、日本刺繍、はこせこ、造花等の手芸も習いました。先生は森、岡田の両先生、国語は農林学校からおいでになり、他は高等科の先生でした。服装は和服に白練入りのえび茶の袴を着用、下駄をはき胸を張って通学したもので、遠方の町村の出身者は、下宿をとっての自炊生活でした²⁶⁾。

町立実科高等女学校の入学志願者および入学者数、卒業者数の推移は次の通りである(第2図)。大正13年以降、入学者数は募集人員の50名を上回り確実に増加していた。大正14年(1925)の小学校高等科在籍児童数は男178、女123となっており、高等小学校への進学も伸びていた²⁷⁾。大正末か



第2図 秩父町立実科高等女学校における入学志願者数、入学者数および卒業者数の推移 (『秩父高等学校沿革史』および『全国高等女学校実科高等女学校ニ関スル諸調査』より作成)
注) 卒業者数は『秩父高等学校沿革史』による。ただし、大正11年(1922)は資料欠。

ら昭和初期にかけて実科高女への進学者は確実に増加し、昭和4年(1929)には4か年へと修業年限が延長され、定員も400名とされた。こうしたことから、進学熱に乗って学校の人気は高まっていったといえる。実科高女生の回想にみられる「胸を張って通学した」²⁸⁾との思いは、秩父における女学校が地域にとってのステイタス・シンボル

としての位置を占めていたことを証左するものであった。

以上、秩父高等女学校の前史として大宮町立裁縫女学校、秩父町立実科高等女学校についてみてきた。次に、実科高女から県立高等女学校への移行について、町議会の資料を中心にみていきたい。

昭和3年(1928)10月5日の秩父町議会では「学校建設ニ関スル件」が議案として掲げられた。議事録には、高等女学校建設の件は懸案となっており、県との交渉が持たれたことが記されている。交渉の結果、県に対し10万円の寄付により実科高等女学校を昇格させることを確認したという。議会では、財源に「特志家ノ寄付ヲ仰キ可成町税増徴ヲ避ケン」として寄付を募ったものの26,000円に止まり、町税の増徴を伴う高女建設の議について採決されることになった。議員の一人から「之レカ建設ニ付テハ多年ノ懸案タリシモノナルヲ以テ多少ノ町税ノ増徴ハ免レサルモ之レカ建設ヲナシタシ」との意見が出され、町税負担の緩和をはかるべきとの意見とあわせて全員賛成により可決されている。前年度の秩父町の歳入総額は195,000円余、こうした財政状況において10万円の費用をかけた女学校建設が進められていたのである。翌昭和4年2月に受入られた寄付は計27,500円、寄付者および金額は次の通りである(第2表)。町の一大事業において、秩父の産業が深く関わっていた様子がうかがえる。この年の町議会では、高女建設に関わる基本財産の処分や借入金についての質疑が相次ぎ、9月には高女建設費として県に対し初年度9万円の寄付をなすことが決議された²⁹⁾。

昭和3年11月の県議会では、高等女学校設置について知事が次のように説明している。

(前略)各地方ニ県立高等女学校ヲ設置シテ文化ノ小中心ヲラシメ、兼ネテ教養アル母ヲ作り農村ニ明ルサト潤ヒヲ持タセタイ。カカル趣向ニヨリ来年度ニ於テ、飯能、秩父、児玉、粕壁、越ヶ谷ノ五ヶ所ニ高等女学校ノ建築ヲ了シ、昭和五年度ヨリ右五ヶ所ノ実科女学校ノ昇格移転ヲ行フ計画デアル(注一)

第2表 高等女学校建設費の寄付者・寄付金

寄 付 者	寄付金(円)
秩父セメント株式会社	10,000
秩父鉄道株式会社	3,000
株式会社秩父銀行	3,000
東京電燈株式会社	3,000
合名会社矢尾商店	2,500
株式会社西武銀行	2,000
株式会社八十五銀行秩父支店	2,000
柿原合名会社	1,000
秩父自動車株式会社	500
秩父絹織物共同販売株式会社	500

(「秩父町議会議録」より作成)

線引用者)³⁰⁾

この時期、既設の県立高女は浦和(明治33年創立)、熊谷・川越(明治44年)、久喜(大正10年)、忍(大正14年)、小川(昭和3年)の6校であった。昭和5年設置の5校は全て実科高女からの昇格であり、地理的バランスに加え経費節減をはかった選択であった。

秩父町立実科高等女学校は、昭和5年(1930)1月県立秩父高等女学校として認可された。同年6月より5,140坪の敷地に総工費62,500円の新校舎建設が始まり³¹⁾、翌昭和6年3月には第1回卒業生を新講堂から送り出している。正面にポーチを持つ女学校の校舎は、学生生活を送る生徒たちのシンボルであった。ここに、埼玉県立秩父高等女学校の第一歩が始まったのである。

Ⅲ 女学生の生活背景

埼玉県立秩父高等女学校は、修業年限4か年、定員400人でスタートした。開校当初の入学者は募集人員の100名に満たなかったが、昭和10年(1935)以降は定員に達している。秩父高等女学校の入学志願者数および入学者数、卒業者数の推移は次の通りである(第3図)。実科高女時代のほぼ全員入学という傾向とは多少異なっていた(第2図参照)。入学者は尋常小学校を卒業した者が大

部分であったが、高等小学校卒業者や同1学年修了者も若干みられた。高等女学校には、12歳から16歳までの少女たちが集うことになった。

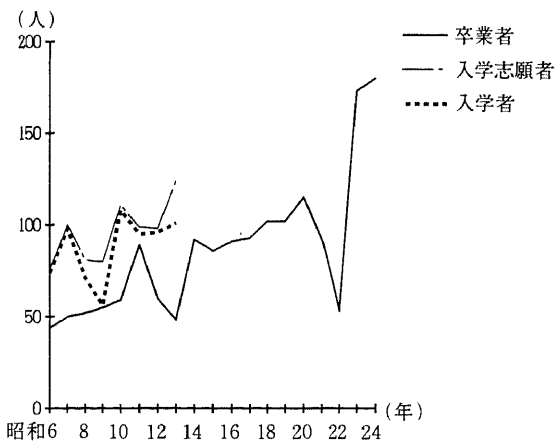
秩父高女の制服は、夏冬揃いのセーラー服であった。布地を東京から仕入れ、上級生が新入生の分を手作りで仕上げたという³²⁾。女学校のセーラー服は、「あこがれの的」³³⁾であった。冬用の長いくつ下は木綿製の手作りであり、一足分約40銭であった。髪型は左右に分けた髪を後ろで一つに束ねるスタイルで、体操の時などには三つ編みもみられた。また、羽織と裾に白線の入った袴が「三大節」用の礼服であった。

高等女学校在学中の学資金を開校から3年後の昭和8年度を例にみてみよう。まず、授業料4円(前年度までは3円50銭)、学友会費40銭、旅行積立50銭、其他納金として10銭、計5円が毎月必ずかかる費用であった。5円という金額は、女中の月給に相当したという³⁴⁾。その他教科書や文房具、裁縫の道具や材料、上靴、靴下駄等を含めた1年間の学費は、計98円87銭であった³⁵⁾。11か月平均で毎月ほぼ9円の学資が必要であった。秩父郡内における昭和6年の米1石の平均価格は16

円36銭、昭和8年頃には1俵当たりの価格が7～8円であったという³⁶⁾。授業料4円という金額はかなりの大金であり、高女生はある程度の経済的余裕を持った家庭を基盤としていたといえる。

学資を支える父兄の職業は、昭和5年(1930)以降の入学者については次表のようになっていた(第3表)。昭和6年までは農業が最も多く、その後商業が増加し昭和9年(1934)には同数となっている。工業も年々全体に占める割合が増えている。昭和12年(1937)になると商業が農業を上回り、公務・自由業も増加している。こうした父兄の職業と生徒の出身地を、昭和8年(1933)入学の高女第7回卒業生を例にみてみると、商業では米穀商、金物商、織物小売業などが秩父町内出身者にみられ、両神や野上には雑貨商がみられた。理容業、歯科医、医師、旅館などの自由業には、秩父町内のほか皆野方面からの出身者もあった。織物製造業は秩父町および原谷・高篠にみられ、銀行員、秩父セメント勤務などのサラリーマンは、秩父町内に数人みられた。農業は、影森・久那・中川村や白鳥村からの出身者が確認され、公務員を兼ねたり、夏期に林業や養蚕を経営し、冬場に勤めに出るという農家もあった³⁷⁾。

高等女学校へ通学する生徒は、秩父町周辺からの出身がほとんどであった。第4表は、同窓会誌掲載の卒業生名簿から、秩父高等女学校卒業生の出身町村を推測したものである。在学時の住所を直接示すものではないが、ある傾向を追うことは可能であると考えられる。これによると、実科高女期には入間郡や大里郡などの住所が確認されるのに比して、郡外出身者がほとんどみられなくなる。これには、小川や飯能、児玉など、秩父周辺地域における高等女学校の設置状況が関わっているものと考えられる。秩父鉄道沿線の野上・皆野・原谷・影森・中川・白川村からは、毎年3～5人ずつみられる。野上駅から高女最寄りのお花畑駅まではおよそ25分、半年の定期代は28円8銭であったという³⁸⁾。名栗村や大河原・槻川・大柵村からの出身者は、実科高女期には数年に1～2人の割合でみられるが、高女になるとみられなくなる。



第3図 埼玉県立秩父高等女学校における入学志願者数、入学者数および卒業生数の推移
 (『秩父高等学校沿革史』および『全国高等女学校』
 『実科高等女学校二関スル諸調査』より作成)
 注) 卒業生数は『秩父高等学校沿革史』による。ただし、昭和14年(1939)以降は資料欠。

第3表 埼玉県立秩父高等女学校入学者父兄の職業

年		昭和5	6	7	8	9	12	13	16
農	業	54 41.2	22 28.5	17 17.3	17 24.0	14 24.6	19 19.2	15 13.9	18 16.4
水	産	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0
鉱	業	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	1 1.0	1 0.9	0 0.0
工	業	12 9.2	18 23.4	15 15.3	15 21.1	11 19.3	17 17.2	23 21.3	22 20.0
商	業	25 19.1	20 26.0	29 29.6	14 19.7	14 24.6	29 29.3	21 19.4	35 31.8
交	通	2 1.5	1 1.3	0 0.0	0 0.0	0 0.0	5 5.1	0 0.0	2 1.8
公	務・自由業	32 24.4	12 15.6	14 14.3	15 21.1	13 22.8	15 15.2	24 22.2	33 30.0
其	他	3 2.3	3 3.9	18 18.4	8 11.3	5 8.8	11 11.1	20 18.5	0 0.0
家	事・使用人	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0	0 0.0
無	職	3 12.3	1 1.3	5 5.1	2 2.8	0 0.0	2 2.0	4 3.7	0 0.0
総	数	131 100.0	77 100.0	98 100.0	71 100.0	57 100.0	99 100.0	108 100.0	110 100.0

(『埼玉県統計書』より作成)

注) 上段は人数, 下段は%を指す。

また、小鹿野方面からも1～2人の出身であり、こうした傾向は実科高女期から変わらない³⁹⁾。上吉田・両神・大滝出身の生徒の中には秩父町の親戚の下宿するという者もあったが、学校が寄宿舎として借り上げた・軒家で寮生活を送った生徒もいた。「家庭寮」といわれた寮には、舎監の先生2～3人と生徒7～8人が生活していた。寮生活を送った学生は、夏の夕暮に先生を囲んで散歩したり、沢山話を聞いたりした思い出を「心の底の洗われるような喜びであった」⁴⁰⁾と綴っている。昭和10年に「大滝、上吉田、日野澤等遠隔の地よりの通学生徒の為」として「準寄宿舎」が設置されたことが「学報」に報告されている⁴¹⁾。この時期、学校の設備・機構が次第に整っていっ

た。

通学は、町内の生徒の場合ほとんどが友人と一緒にであり、影森、尾田蒔、高篠村などからは自転車通学もみられた。この時期、女子の自転車にも抵抗がなくなったようである。セーラー服の高女生の姿は、町の人々の目にも印象づけられていったといえる。

こうした女学生の生活にも、昭和恐慌の影響は無関係ではなかった。物価の急落に加え絹の生産・消費量が伸び悩み、買継商大森商店、柿原商店が相次いで支払停止にいたるなど、秩父の経済に深刻な打撃を与えていた。その影響は、中途退学者数の増大にもあらわれている。実科高等女学校以来の退学者数の推移は次の通りである(第4

第4表 埼玉県立秩父高等女学校生徒の出身地

出身地	卒業年	昭和7年	昭和8年	昭和9年	昭和10年	昭和11年	昭和12年	合計
樋口村		0	1	1	2	0	0	4
野上村		2	2	4	2	0	4	14
國神村		3	5	0	0	2	1	11
白鳥村		1	1	3	0	1	1	7
皆野町		0	2	2	3	2	2	11
原谷村		6(1)	2	3	4	5	1	21(1)
三澤村		1	0	0	0	0	1	2
槻川村		0	1	0	0	0	0	1
大河原村		0	0	0	0	0	0	0
大桐村		1	0	0	0	0	0	1
高篠村		0	0	1	0	1	1	3
尾田村		0	3	0	4	0	3	10
秩父町		21(1)	21(3)	18(2)	19	42	29	150(6)
横瀬町		2(1)	3	6	3	5	3	22(1)
芦ヶ久保村		0	0	0	0	1	0	1
影久森村		0	2	1	3	2	6	14
久那村		0	0	0	0	0	1	1
浦山川村		1	0	0	0	0	0	1
中川村		4(3)	1	1	4	3	2	15(3)
白川村		0	1	2	0	3	1	7
大金滝澤村		3(1)	1	0	2	4	1	11(1)
矢野澤村		1	0	0	0	0	0	1
日野澤村		0	1	2	0	1	0	4
大田村		0	0	1	1	1	0	3
大吉田町		0	2	0	1	2	1	6
上吉田村		0	0	0	0	1	0	1
倉尾村		0	0	0	0	0	0	0
小鹿野町		1	1	0	1	1	0	4
長若村		0	0	1	1	0	0	2
両神村		0	0	1	0	2	1	4
三田川村		2	0	0	1	2	0	5
県内の他郡市		0	1(1)	1	0	1	1	4(1)
東の京府		0	0	5(1)	6	2	0	13(1)
他の府		1	1(1)	2(1)	1	1	0	6(2)
不		0	0	0	0	3	0	3
合計		50(7)	52(5)	55(4)	59	88	60	306(16)

(昭和11年7月刊『ち、ぶ』第4号・昭和11年度卒業アルバムより作成)

注) 昭和12年のみ昭和11年度卒業アルバム、他の年は『ち、ぶ』第4号の数値に拠った。

() は内数で既婚者の数を示す。

図)。昭和4年の統計では7名であった前年度退学者が昭和5年には22名、さらに翌6年には25名と激増しており、その8割以上が「家事ノ都合」を理由としていた。家庭経済の崩壊は、学生生活にも大きな影を落とした。それゆえ、不況の時期に高女生であることは「或る人達にとっては羨望の的」、「御友達はうらやましく思っていたらしい」⁴²⁾との思いを高女生自身に抱かせることとなったのである。

IV 学校生活の四季—同窓会誌から—

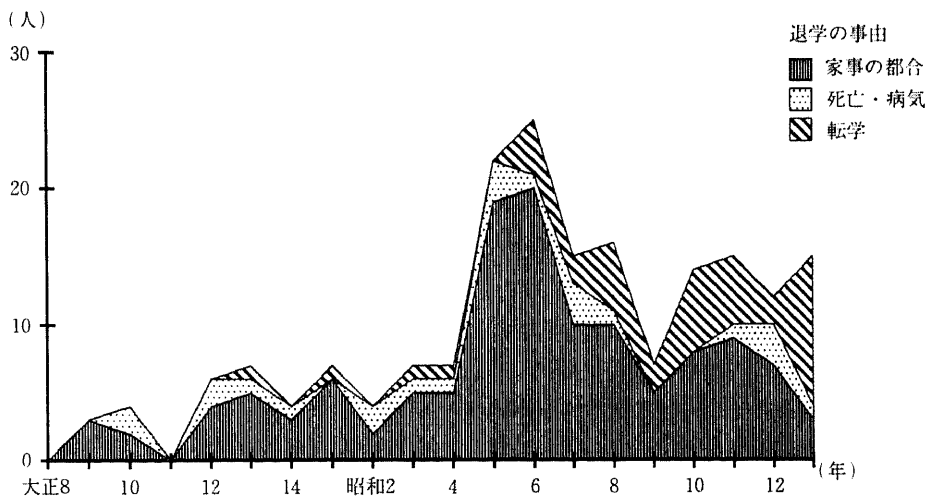
新校舎の落成なった秩父高女では、昭和6年(1931)10月に修祓式が行なわれた。府立一女の校長市川源三が講演に来たとき「此の学校がモダンで驚きました」⁴³⁾と述べた校舎であった。修祓式当日を振り返った生徒の作文には、新しい学校への希望があふれていた。

修祓式に当つて——武甲の峰の如く、どつしりとした土台を固め、すこやかな女性を社会へ送り出して、良妻賢母となるのを眼目としてゐる秩父高女の

誉を高くし県下一の女学校になる事を希望して止みません⁴⁴⁾。

「どつしりとした」すこやかな女性として、将来の良妻賢母たらんとする一生徒の自覚は、大人たちの高女生への眼差しをそのまま反映したものであった。高等女学校は町の要請として、町立の実科高女であった女子教育機関を「完全なるものになりたい」⁴⁵⁾との思いから生まれたものであり、「完全なる」女子教育の場の実現にほかならなかった。それゆえ県立昇格は、町をあげて推進した事業であった。ここでは、秩父高女の教育がどのようなものであったのかを軸に、女学生の学校生活をあとづけていく。昭和7年に創刊号が発刊された同窓会誌『いはしみづ』(第4号から『ち、ぶ』と改称)や、昭和8年から12年まで在籍した高女第7回卒業生の「声」⁴⁶⁾を中心にみていきたい。

昭和8年(1933)6月9日付の『東京日日新聞』埼玉版に「県下学校長会議の中心問題」と題する記事が掲載された⁴⁷⁾。教育方針について検討する会議に先立ち、中心となる議題を紹介した記事



第4図 秩父町立実科高等女学校および埼玉県立秩父高等女学校における退学者数の推移

(『全国高等女学校実科高等女学校ニ関スル諸調査』より作成)

注) ただし、大正11年(1922)は資料欠。

であるが、女学校については「お嫁さん教育から一歩進んで主婦教育をなすため家事、裁縫を中心とし語学は随意科目とする」とされていた。高等女学校の教育について、実生活に役立つ主婦教育としての役割を果たすべきとの論調は、「良妻賢母」の内実を曝すものでもあった。ただし、「良妻賢母」の中身はそれぞれの学校において異なる多様なものであり、当然地域性も考慮されたものであった。

秩父高女には、三つの「校訓」が掲げられていた。

- 一、質素励精以テ温良、貞淑ノ徳ヲ修ムベシ
- 一、規律節制ヲ重ンジ身体ノ強健ヲ図ルベシ
- 一、知能ヲ錬磨シ之ガ实用ニ努ムベシ

さらに、校訓に連なる実践として「一事貫行」「責任遂行」を「実行綱領」とし、より具体的な言葉として五つの「生徒訓条」があった。

- 一、本校生徒タルモノハ容儀ヲ端正ニシ品位ヲ保ツヘキコト
- 一、本校生徒タルモノハ師友ヲ敬愛シ言行ニ表裏ナキコト
- 一、本校生徒タルモノハ格物ヲ旨トシ自学ヲ尚フヘキコト
- 一、本校生徒タルモノハ健康ニ留意シ鍛錬ヲ喜フヘキコト
- 一、本校生徒タルモノハ儉素ヲ樂シミ明朗ノ心ヲ失ハサルコト⁴⁸⁾

生徒はこれらの「訓条」を朝礼で唱え、暗誦するほどになっていた⁴⁹⁾。教育方針の一端は、父兄に対して伝えられた「本校訓育の要旨は質素勤勉、孝順貞淑なる有徳の実生活に役立つ力強い婦人を養成するに努むるもの」⁵⁰⁾との言葉にもあらわれている。

昭和9年(1934)からは石井潔校長(千葉県出身、1915年広島師範の国語漢文部卒)のもと、さらなる学校の基盤整備が進められていった。石井校長

に対する生徒の印象は、30分以上はあったという朝礼の話にも「熱のこもった講話にひきこまれてしまう」との思い出や、「アクの強い人」「気骨ある行動力のある方」⁵¹⁾というものに代表される。英語コース、漢文コースなどの「コース」を設けたり、廊下をたわしでピカピカに磨くという掃除の在り方や、校庭でのスキーや荒川での水泳などスポーツを奨励したこと、1食2銭でおかずのみの給食を実施したことなど、校長の裁量によると思われるものが確認出来る。

その中で、昭和10年(1935)7月には「家事的実務演習」とする演習が実施されたが、これは障子貼りや包丁研ぎなど普段の家事科では出来ない日常の家事を実習させるものであった⁵²⁾。家事科の内容が実際の生活に対応しきれていないとの意識から、新たな家事教育を展開しようとしたことによるものと考えられる。また、昭和11年に行われた「作業」を学校生活の思い出として挙げた人が多くあった。これは、校庭の周囲に石垣を作るため荒川の石を運び、それを積み上げるというものであり、先生、生徒共に放課後毎日のように取り組んだ。石を拾いに行き、学校まで運び、さらに積み上げるという作業は「相当骨が折れました」との言葉通りかなりの重労働であっただけに、「一生の思ひ出になる『女学生時代の石積』でございました。又それにより身心の鍛練された事も多大なものでございます」⁵³⁾として、生徒の心に深く刻まれることとなった。経費節減をもたらした石垣積みには、各教室へのラジオ設置という「ご褒美」が伴い、「毎日それを聞き乍ら、楽しく気持ち良く昼食を致します」という光景を生んだ。こうしたことは、女学校の教育に学校長の個性が大きく影響していたことの一例であった。

秩父高女の教員には、埼玉のみならず東京や長野、広島、岡山など他県の出身者もみられた。先生に対しては、教科書以外の知識を幅広く教えてくれる先生に魅力を感じていた学生が多かったようである。国語で『大言海』などの辞書の引き方を徹底して教え、「ことわざ講義」など異彩を放つ授業を展開した「赤門」出身の先生を「影響を

受けた先生」として挙げる人が多数に上っている。また、「歴史とは何か」を圧倒的知識量で説く地歴の先生にも強い印象を持っている人が多い。よい先生との出会いは、学校生活の宝となり、生涯の思い出となっていた。

修学旅行は学生生活最大の行事であった。高女第7回生の修学旅行は、昭和11年5月4日から6日間の日程で京都、奈良、伊勢、名古屋、長野を訪ね、東京での朝日新聞社見学なども含まれており、費用はおよそ19円であった。旅行に心はずませる姿は、「思えば女学校生活を憧れし小学五六年の時代からこの喜びは空想、否予想し小さな胸をときめかしてゐた」⁵⁴⁾という嬉しさに満ちたものであった。

高女第7回生の入学当初、生徒数が定員に満たず、先生が自転車で家々を巡り生徒を募集していた⁵⁵⁾。そうした入学から4年、いよいよ卒業の時を迎えた。第7回生の中には、女子師範二部へ進学した者や、さらに東京の私立学校へ進学する者もあり、進学先には大妻技芸学校、実践女子専門学校、東京家政学院、共立女子学園、和洋女子専門学校などがあつた。就職した人も数人にのほり、そのきっかけは全て紹介によるものであった。就職先には、織物工業組合などがみられる。家にいて家事を手伝う人もあつたが、その中には裁縫や生け花の稽古に通ったり、裁縫を頼まれたりすることもあつたという⁵⁶⁾。

昭和12年3月に卒業した高女生は、まさに戦時体制が強まる社会へと船出したのであつた。

V 秩父における女学生

高女生の卒業後の進路は、年を追う毎に進学者が増加する傾向を示していた。実科高等女学校以来の卒業生の進路は次のようになっている(第5表)。同窓会誌の「卒業生消息」に寄せられた手紙には、さきにもみた高女第7回生以前から東京へ進学している様子がかがえる。また、「産婆学校」や「簿記学校」、「タイピストの学校」など職業を目指す学校へ通っているというものもみられ

る⁵⁷⁾。こうした進学状況は昭和5年以降、高等女学校組織変更後の入学生に顕著である。そして、昭和11年卒業生の中には「母校研修科に在学中」という者も5名あつた。研修科は「時代の要望に鑑みて設置す」「実践的な役立つ婦人の養成を目的とす」とされ、裁縫、手芸、家事染色のほか、国語、公民、数学、地歴、園芸、修身、理科、手工の各科目が揃っていた⁵⁸⁾。実家で「花嫁修業」をする者の中にも、生け花や和裁の稽古にあきたらず研修科を求めるといふ動きに象徴されるように、より高い教育への要望が年とともに強くなっていく。

では、高女生たちは卒業後いつの時点で結婚を迎えるのか。同窓会名簿をみると、卒業後3、4年を経て結婚するという人があらわれはじめる。昭和12年卒の高女第7回生の場合、早い人では卒業から3年後の19歳で数人結婚している。最も多いのは22、3歳での結婚であり、昭和17、8年という戦時下に多くの人が結婚していた。この後に結婚した人は、終戦をはさんで20代後半となっており、同じ職場での恋愛結婚であつたという人も数人みられる⁵⁹⁾。戦争をはさんで、結婚観にも大きな変化が及んでいた。

秩父高女では、昭和17年ごろになると徐々に戦時体制に組み込まれていく⁶⁰⁾。昭和16年に入学した一学生は、翌昭和17年ごろから授業らしい授業はほとんどなく、被服廠から学校へ割り当てられるズボン・上着縫い、秩父セメントの袋貼り、留守家族への勤労奉仕などの日々を過ごした⁶¹⁾。

昭和15年(1940)ごろから秩父高女の在籍者数は急増している。昭和18年以降は、疎開者が増えた影響で1学級が70人にもなっていた⁶²⁾。こうした戦時下においても、高女生であるということは「町で特別」の存在であり、「大威張り」で通学したという思いを抱かせるものであつた⁶³⁾。それは親にも共通する思いであり、「先生方も生徒諸君も、郡下のエリートの集まりで、親も子らも一種の怜悧と気概も備えていた」⁶⁴⁾として、地域の中に独特の世界を形成していた。

高女を卒業したことは、「どこへ出て行きまし

第5表 秩父町立実科高等女学校・埼玉県立秩父高等女学校の卒業生の進路(大正9年～昭和13年)

(a) 秩父町立実科高等女学校

卒業年 進路	大正9	大正10	大正11	大正12	大正13	大正14	大正15	昭和2	昭和3	昭和4	昭和5	小計
更ニ学校ニ入 リタルモノ	2 10.0	—	—	—	—	4 11.4	—	1 1.9	2 4.0	4 5.9	2 3.3	15 3.6
教員トナリタ ルモノ	6 30.0	1 5.3	—	3 10.3	3 9.0	—	—	—	—	—	—	13 3.1
其他ノ職ニ就 キタルモノ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3 4.5	—	3 0.7
其他ノ者	12 60.0	18 94.7	—	26 89.7	29 87.9	31 88.6	50 100.0	53 98.1	48 96.0	60 89.6	59 96.7	386 92.3
合計	20 100.0	19 100.0	—	29 100.0	33 100.0	35 100.0	50 100.0	54 100.0	50 100.0	67 100.0	61 100.0	418 100.0

(b) 埼玉県立秩父高等女学校

卒業年 進路	昭和6	昭和7	昭和8	昭和9	昭和10	昭和11	昭和12	昭和13	小計	合計
更ニ学校ニ入 リタルモノ	8 18.2	—	2 3.8	4 7.2	11 18.6	10 11.2	15 25.4	11 22.9	61 13.4	76 8.7
教員トナリタ ルモノ	—	1 2.0	—	—	1 1.7	—	1 1.7	2 4.2	5 1.1	18 2.1
其他ノ職ニ就 キタルモノ	—	3 6.0	2 3.8	4 7.2	3 5.1	7 7.9	5 16.9	10 10.4	34 7.5	37 4.2
其他ノ者	36 81.8	46 92.0	48 92.4	47 85.6	44 74.6	72 80.9	33 55.9	30 62.5	56 78.0	742 84.9
合計	44 100.0	50 100.0	52 100.0	55 100.0	59 100.0	89 100.0	59 100.0	48 100.0	56 100.0	874 100.0

(『全国高等女学校実科高等女学校ニ関スル諸調査』より作成)

注) 上段は人数, 下段は%を指す。

ただし, 大正11年(1922)は資料欠。

てもひけとはらず, また「自分自身で誇りを持って居ました」⁶⁵⁾として生き得る源泉となるものであった。

高女卒は同世代の中でも希少な存在として, 社会の中でも重きを置かれることとなった。「田舎で指導的立場になれた」⁶⁶⁾という声が示すように, 戦時中秩父の本町女子青年団支部長をした人や, 尾田蒔で女子青年団副団長を務めた人, 壮年期を迎え町や村の婦人会長となった人, 小・中学

校P.T.A.の役員を務めた人などが幾人かみられる。また, 老人クラブや短歌の会代表をしているという人もいる。そして, 19歳の時結婚し22歳で夫と死別したある高女卒業生が, 姑と子供3人を抱えて職を得なければならなかった時「秩父高女卒の学歴が非常に身に沁みた」⁶⁷⁾との思いは, 社会における女学校卒の持つ意味を考えさせるものである。女学生が社会に期待される地位を築きつつあった一つのあらわれといえよう。

高等女学校での日々を振り返り、多くの人がかき友人に出会ったことをいちばんの思い出に挙げている。そして、「女学生時代の友人が一番心おきなくおつきあい出来る」⁶⁸⁾として現在でも交流が続いているという。女学校における出会いは、人生の財産として自らの目を啓くきっかけとなるものであった。女学校時代は、まさに「わたしの目覚めの時代」⁶⁹⁾として、自ら社会への眼差しを養う大切な時間だったのである。

VI おわりに

以上、秩父高等女学校を通して1930年代を中心とした女学生の在り方についてみてきた。

秩父における女子教育の発展は、地域の近代化の指標といえるものであった。それは、産業の発達に伴う人口の増大と深く結びつき、町の経済が成長する中で実現されたものであった。そして、地域が女子に対するより高い教育を望むという要求こそ、新しい意識の基底をなすものの一つであった。

女学生であるということは、生活環境に大きく左右される事柄であった。女学校という場に姿をあらわさない多くの女性たちと、女学校で学び得た女性たちとが、地域の中でどのような関わりを持っていたのかという点は、女学校という場を相対化する上で重要な問題であり、今後の課題としたい。

付 記

現地調査に際しては、井上徳子さん、松本美智代さん、新井トヨ子さんには聞き取りにご協力いただいたほか、貴重な史料を閲覧させていただき、たいへんお世話になりました。高田喜好先生には、聞き取り、史料の閲覧にご協力いただいたほか、多大のご教示を賜りました。秩父高等女学校昭和12年卒業生の皆様には、アンケートにご協力いただきました。以上、記して心より御礼申し上げます。

注および参考文献

- 1) 「大宮町立裁縫女学校学則」、秩父第一小学校百年記念事業実行委員会(1973)：『秩父第一小学校目でみる百年』、同委員会、50ページ。
- 2) 「明治7年熊谷県内小学生徒試験表」、埼玉新聞社(1979)：『秩父地方史必携 近代編』、埼玉新聞社、40ページ。
- 3) 「田中千弥 秩父暴徒雑録」、小野文雄・江袋文男監修(1972)：『秩父事件史料 2』、埼玉新聞社、533ページ。
- 4) 秩父市誌編纂委員会編(1962)：『秩父市誌』、秩父市、567ページ。
- 5) 埼玉県教育委員会編(1971)：『埼玉県教育史 4』、埼玉県教育委員会、216ページ。
- 6) 明治25年5月「奥田栄之助巡視復命書」、前掲5)、197ページ。
- 7) 「秩父教育義社規則」秩父市立図書館蔵、2ページ。年次不詳であるが、明治16年成立と推測される。
- 8) 前掲7)、3ページ。
- 9) 前掲7)、2ページ。
- 10) 埼玉県秩父織維工業試験場・秩父織物変遷史編集委員会編(1960)：『秩父織物変遷史』、埼玉県秩父織維工業試験場、103ページ。
- 11) 前掲5)、299ページ。
- 12) 前掲5)、301ページ。
- 13) 前掲1)、50～51。
- 14) 秩父郡教育委員会編(1925)：『埼玉縣秩父郡誌』、秩父郡教育委員会、324ページ。
- 15) 県全体では3,443名であり、秩父郡は4.7%にすぎない(埼玉県編(1984)：『新編埼玉県史 25』、埼玉県、534ページ)。
- 16) 前掲1)、50～51。
- 17) 浅見宇市(1870-1948)は明治37年から大正10年まで大宮小の校長を務め、後に秩父町長や県会議員を歴任した人物。
- 18) 前掲5)、524ページ。
- 19) 黒沢ミツ(1980)：秩父裁縫女学校創立のころ、埼玉県立秩父高等学校校史編集委員会編『七十年のあゆみ』、埼玉県立秩父高等学校、62ページ。
- 20) 「秩父町議会会議録」。なお、大宮町は大正5年1月に秩父町となっている。
- 21) 伊古田豊三郎(1856-1934)は、大宮郷戸長を経て明治22年以降連続41年間秩父町議会議員に当選、その間3度町長を務め、明治20年から同44年まで県会議員も務めている。教育行政に尽力し、裁縫女学校設立に際しても功績があったとされている。
- 22) 前掲14)、325ページ。
- 23) 前掲14)、38ページ。

- 24) 前掲10), 164~167。
 25) 前掲1), 52~53。
 26) 「秩父高校80年の歩み“母校を語る”座談会」, 秩父高等学校同窓会編(1986): 『秩父高等学校同窓会報 秩父』第1号, 秩父高等学校, 2ページ。
 27) 「秩父町事務報告書」(大正14年), 秩父の教育百年誌編集委員会編(1969): 『秩父の教育百年』, 秩父市教育委員会, 86ページ。
 28) 前掲26), 2ページ。
 29) 「秩父町議会会議録」。
 30) 埼玉県教育委員会編(1972): 『埼玉県教育史 5』, 埼玉県教育委員会, 328ページ。
 31) 埼玉県立秩父高等女子学校同窓会・学友会編(1932): 『いはしみづ 1』, 秩父高等女子学校, 18ページ。
 32) 埼玉県立秩父高等女子学校昭和12年卒業生へのアンケートによる。1996年1月実施, 回収率66.7%。
 33) 前掲32)。
 34) 前掲32)。
 35) 秩父高等女子学校昭和8~11年度通信簿による。
 36) 「埼玉県統計書」(1931), 井上徳子さんからの聞き取りによる。
 37) 前掲32)。
 38) 前掲32)。
 39) 小鹿野には, 小学校以上の教育機関として小鹿野実業補修学校(1908年創立)や長若農業補修学校(1919年創立)が設立されていたが, 女子の中等教育機関としては昭和18年(1943)に小鹿野実修女子学校が設立されたのが最初であった(小鹿野町誌編集委員会編(1976): 『小鹿野町誌』, 小鹿野町, 626ページ)。
 40) 前掲32)。
 41) 埼玉県立秩父高等女子学校同窓会・学友会編(1936): 『ち、ぶ 4』, 秩父高等女子学校, 235ページ。
 42) 前掲32)。
 43) 市川源三(1934): 女子の本質, 埼玉県立秩父高等女子学校同窓会・学友会編『いはしみづ 3』, 秩父高等女子学校, 4ページ。
 44) 前掲32)。
 45) 浅見宇市「祝辞」, 前掲31), 23ページ。
 46) 前掲32)。
 47) 埼玉県編(1990): 『新編埼玉県史 26』, 埼玉県, 190ページ。
 48) 前掲41), 巻頭。
 49) 井上徳子さん, 松本美智代さんからの聞き取りによる。
 50) 前掲35)。
 51) 前掲32)。
 52) 前掲41), 222ページ, および, 前掲49)。
 53) 松本美智代「作業部」, 前掲41)所収, 263~264。
 54) 浅見登志子「秩父より東京まで」, 前掲41)所収, 93~95。
 55) 前掲49)。
 56) 前掲32)。
 57) 前掲41), 275ページ。
 58) 前掲41), 282~283。
 59) 前掲32)。
 60) 前掲47), 261~262。
 61) 新井トヨ子さんからの聞き取りによる。
 62) 高田喜好(1995): 『秩父雑炊抄』, まつやま書房, 211ページ。
 63) 前掲61)。
 64) 前掲62), 190ページ。
 65) 前掲32)。
 66) 前掲32)。
 67) 前掲32)。
 68) 前掲32)。
 69) 前掲32)。